

夜勤スタッフのよなよなトークルーム

メンバーさんの安らかな寝顔を、一緒に守る仲間たち。
仕事のやりがい、日々の楽しい一コマ、自分のライフスタイル…
夜勤をテーマに自由に話してもらいました。

ライフゆう編

メンバーさんにベッドサイドで、1日の終わりの挨拶や目覚めの挨拶ができることが喜びです！そしてスタッフ同士の团结力が高まります！！また、早朝、窓から見える景色はぜいたくです…。



障害はあっても基本病気の方はいない、普通の大人の方が過ごす場所として思っていますが、夜はひとりひとりメンバーさんとの濃厚な関わりが必要です。だから、一夜を守り抜いた後の達成感はすごい。帰って、自分にごほうびのスイーツをあげちゃいます！(笑)

安藤さん・支援スタッフ

2人の子供がいるため、昼間にゆっくり家事の時間をとりたくて夜勤専門という働き方を選んでいます。イベントやお出かけといった派手な出来事はありませんがみんなが寝ている間に明日の準備をするので、縁の下の力持ちとして役に立てている感じが好きです。

仲平さん・看護スタッフ



ケアホームが始ま以来十数年、今夜も無事に過ごせますようにと思いつつ、何事もなく過ごせた時は本当に安堵します。忙しい日常の中でメンバー

さんの笑顔にはとても癒されています。勤務が終わった午後は、自分の時間として有意義に過ごしています。

天川さん・支援スタッフ

ケアホームスタート時はメンバーさんが夜中に目覚めると再び眠りにつくまで側に付き添っていましたが、今では、各自のお部屋で一人で過ごす時間を楽しめています。眠くなるまで、各部屋の扉は明けたまま。リビングでのスタッフのお喋りにニヤニヤしながら耳を澄ましていらっしゃいます。そんな日々のご様子に、こちらが元気をいただく時も多いです。

小松さん・支援スタッフ



メンバーさんの安らかな夜と元気な明日を、一緒に作ってみませんか？

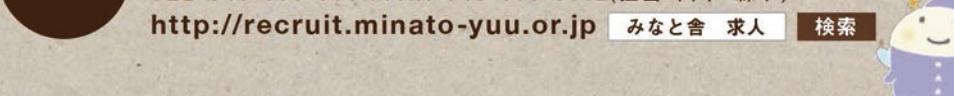
社会福祉法人 みなと舎

所在地:神奈川県横須賀市芦名2-8-17

TEL:046-855-3911/FAX:046-855-3912(担当:山本・森下)

<http://recruit.minato-yuu.or.jp>

問い合わせ



みなと舎のフリーべーべー

暮らしの選択 家庭・グループホーム・施設

メンバーさん、ご家族、夜勤スタッフ。
それぞれの「夜のかたち」から

<http://www.minato-yuu.or.jp>

TAMAGOMUSHI

たまごむし

VOL.05 2015NOV



暮らしをつくる夜のかたち

みなさんは、どんな夜を過ごしていますか。

職場や学校から帰って、ご飯を食べて、
好きな本やテレビを見て。
あたたかいお風呂に入って、
ゆったりくつろいで、おやすみなさい。

帰る場所も違えば、ともに過ごす人も違う。
夜のあり方は、その人の暮らし方や生き方をも
映し出しているようです。

そんな、一人ひとりの「夜のかたち」。

暮らしに人の助けを必要とする
「みなと舎」のメンバーさんたちは、
どんな夜を過ごしているのでしょうか。

ひとりで趣味に没頭するメンバーさん、
仲間と一緒に遅くまで起きているメンバーさん。
家族との会話を楽しむメンバーさんもいるでしょう。

暮らす人、近くで支える人、遠くから見守る人。
それぞれの想いが重なりあって、
明日への希望は生まれていきます。

まだ誰も見たことのない、それぞれの「夜のかたち」。
こっそり覗いてみませんか。

くれぐれも、お静かに、お静かに……

ほら、
夜がやってきたよ。



Contents

★ Family interview

それぞれの夜、メンバーさんの3つのかたち	...03
「ライフゆう」というかたち/斎藤絵美さんのご家族	...04
「ケアホーム」というかたち/向山朋美さんのご家族	...05
「自宅」というかたち/小野洋平さんのご家族	...06

♪ Staff interview

夜を支えるスタッフ特集	
「ライフゆう」看護スタッフ 生駒千恵子さん	...07
ケアホーム「はなえみ」キーパーソン 田辺なおみさん	...11

★ Report

夜の方程式	...15
-------	-------

♪ Message

「ライフゆう」看護師長 番場清美	...17
みなと舎常務理事 森下浩明	...18

それぞれの夜、メンバーさんの3つのかたち。

みなと舎のメンバーさんには、大きく分けて3つの「夜のかたち」があります。

それぞれの暮らしの中で、どんなことを感じているのでしょうか。

今の暮らしのかたちを選んだ理由は?

ご家族のみなさんに、お話を聞きました。



ライフゆう

2014年5月にオープンしたみなと舎の新しい医療型入所施設「ライフゆう」。ご家族と離れ、32名(2015年11月現在)のみなさんが、24時間、仲間との共同生活を送っています。



斎藤絵美さんのご家族
P.04へ▶



向山朋美さんのご家族
P.05へ▶

ケアホーム

みなと舎の2つのケアホーム「はなえみ」「はなあかり」。それぞれ4人のメンバーさんが個室を持ち、「ゆう」から帰宅後は、仲間と家族のような雰囲気で暮らしています。



夜過ごす場所は
大切だよね。



自宅

「ゆう」に通うメンバーさんの約8割の方が、自宅から通所されています。日中は仲間と、夜はご家族と。リズムある暮らしを送っています。



小野洋平さんのご家族
P.06へ▶

「ライフゆう」というかたち

いつまでも変わらぬ暮らしを。
楽しみと寂しさを携えた、
家族の新しい日々。

Q1. 「ライフゆう」を選んだ理由は?

「ライフゆう」ができたタイミングで、迷いながら入所を決意しました。

養護学校を卒業後、すぐに「ゆう」に通い始め、12年ほど経った頃に「ライフゆう」ができました。当初、入所は考えていなかったんですが、やはり親は歳をとりますよね。周りに、「いざ入ろうと思ったときに、空きがなければ入れませんよ」と言われて……。同じ法人で、スタッフも知っている方が多く、安心だと思って決めました。

本来は、親が看るのが一番いいと思いますが、娘は医療行為が必要だったので、養護学校でもずっと親が付き添い、冠婚葬祭はもちろん、買い物にも行けない生活を続けてきて……。「ゆう」に通うようになって随分楽になりましたが、吸引のために毎日夜中に起きたり、自分の子どもなので苦にはなりませんが、やはりハードでした。

「一緒に暮らしたい」というのが本音ですが、現実には、かなり助かっています。将来のことを考えると、やむを得ない選択だと思っています。

Q2. 今の暮らしの中で、感じていることは?

寂しい気持ちと、安心な気持ち、両方あります。

心の準備ができていなかったので、最初はすごく寂しい気持ちでした。入所から18ヶ月経った今でも、これまで通り夜中に目が覚めてしまったり(笑)。徐々に慣れなきやな、と思っています。



今は3日に1回、面会に来るのがとても楽しみです。娘はなかなか表情に出すことができないので、本人の気持ちは正確にはわかりません。でも、スタッフの方からは、「お父さんお母さんが来られると、いい表情になる」と言っていただけますし、抱っこしてリハビリしていると緊張が抜けていくのが分かります。娘も家の延長線上でリラックスしているのかなと思い、うれしいですね。

Q3. これからの希望と願いは?

今の暮らしが変わらずに続いてほしい、ただそれだけです。

生活というのは、基本的には毎日同じことの繰り返しですから、長いスパンで同じスタイルが続いてくれればいいかな、と思っています。娘も私たちも、3回ご飯を食べて、お風呂に入って寝て、それが根本。だから、「何もないことはいいことだ」と思っています。基本の暮らしがあって、あとは余力というか、おまけと言うか……。

そう思って暮らしています。



メンバーさん: 斎藤絵美さん(33歳)

夜暮らす場所:「ライフゆう」

お話し: 誠二さん(お父様)美代さん(お母様)



メンバーさん:向山朋美さん(41歳)
夜暮らす場所:ケアホーム「はなあかり」
お話:光子さん(お母様)

ケアホーム という かたち

遠く離れた地での日々を乗り越えて。
娘と家族の安心の暮らし
が、
ここにあります。

Q1. ケアホームを選んだ理由は?

きっかけは、私の病気でした。

設立当初から「ゆう」に通っていましたが、8年ほど前、私が網膜剥離を患い、すぐに入院、手術となってしまいました。退院後も自分の暮らしで精一杯の状態で、しかも、我が家は主人と娘と3人家族。娘の世話をお願いできる親族もいませんので、しばらくは「ゆう」のショートステイや病院を転々としていました。

でも、やはり娘は落ち着かず、翌年、静岡県の病院に入りました。そこで暮らしはもう、入院という感じの、喜怒哀楽のない毎日で……。もともと娘は、笑いのよく出る子だったので、そのときは感情を表に出さず、天井を見つめているような状態でした。あまりにも可哀想で、「連れて帰りたい」と思っていたところ、「みなと舎」の2つめのケアホーム「はなあかり」ができて、真っ先に手を上げました。

Q2. 今の暮らしの中で、感じていることは?

ケアホームを利用して良かった、と感じています。

「はなあかり」に入って6ヶ月ほどで、いつもどおりの笑いが見られるようになりました。顔見知りの仲間と同じホームに入って安心したんだと思います。楽しいときもそうでないときも、今では自由に感情を表現できているようです。

一方で、集団生活を続けて行く中で、家とは違う“ケアホームの顔”を持つようになりました。仲間やスタッフのみなさんにはある程度我慢して、その場の雰囲気に合わせて使い分けができるようになります。今では、ケアホームに行くと、「私はここで楽しくやるから、親は要らない」という感じ(笑)。ホームを利用してから、「自立」が感じられるようになりました。

Q3. これからの希望と願いは?

みなと舎への希望は、実は沢山あります(笑)。

作業所時代のことを思うと、給食も送迎もあり、親の負担は軽くなりました。「ライフゆう」もできて、いざというときに入所するところがあるので、親として安心です。でも、できればケアホームの週末の宿泊を1泊にしてほしいなど、まだまだ希望はあります。ゆくゆくはそうなることを願っています。

個人的には、これまで子どもに付きっきりの人生でしたので、時間があれば、ちょっとした旅行をしてみたいなど思います。

一緒に行く相手は……。誰もいないので、たぶんお父さんですね(笑)。



自宅 という かたち

共に生きていく。
私たち親子の願いです。

Q1. 自宅を選んだ理由は?

今までこれが自然だったからです。

本人も私も、今はまだ他の選択肢はないと思っています。「Yes」のときは「ふーん」と言い、「No」のときには首を振るのが洋平の合図。時々「『ライフゆう』で暮らす?」って聞くと、首を振るんですよ。

本人の身体も大きくなり、私も年を重ね、確かに大変です。それでも、意思表示する表情がかわいらしかったり、寝顔を眺めたりしていると、その日の疲れがとれて癒されます。

Q2. 今の暮らしの中で、感じていることは?

「ゆう」に通所するのが洋平の生き甲斐。それを出来る限り継続させてあげたいです。家での洋平は感情表現が豊か。退屈したり、お腹が空いてくると、「うーん」と言って訴えかけたり、テレビの音が聞こえなくなるくらい大声で笑ったり、とにかく私の感情を揺さぶってくれます。

私の中の洋平は小さい頃のままでですが、ずいぶん大人になったかな。最近は泣かなくなりましたし、実習に来た同年代の女の子を意識することもあるそうです。微笑ましくて、その様子を柱の陰から見てみたい。あと、ショートステイも楽しめるようになりました。嫌がっていた頃もあったんですが、今ではお泊りの日の朝、送迎車でずっと笑っているそうです。

そんなわけで、感情表現豊かな洋平のエピソードを「ゆう」の連絡帳に長々と書いてしまうことが多々あります。

今朝「時間短縮の睡眠でも寝足りないよう」2度寝ばかりしてしまったが、度胸に声をかけてくれます……。お腹が空いて手に口で食べ物を運んでいたり、お風呂で水遊びをするときに、お風呂の水曜日の再登校のために	今朝迷路車に葉子重前し大き口を開けて散歩を走る。脚手を抱きながらに帰宅した時は、お風呂で水遊びをするときに、お風呂の水曜日の再登校のために
---	---

↑ 洋平さんのお母様が書いたある日の連絡帳

Q3. これからの希望と願いは?

今の暮らしを続けていきたいです。

選択肢があることは本当に幸せなことです。将来に不安がないわけではありませんが、今の時点では「ライフゆう」にお願いする決心がつきません。洋平の将来の安定を逃してしまう結果になら、彼に申し訳ない。それでも共に生きていきたい気持ちの方が勝ってしまいます。

みなと舎さんには事あるごとに助けていただき感謝しています。強いて言うならば、ショートステイの最長期間を2泊から1週間くらいにして欲しいです。東日本大震災の時、宮城の両親の本家が全壊し、親戚が壊滅的な被害にありました。そういう時に自分が動けなかったのが、とても残念でした。

洋平を安心して預け、いつか田舎でお墓参りして、頑張っているいとこたちに会いたい。

それが、私がやり残していることなので。

Staff interview★

夜を支えるスタッフ特集 その1



24時間つながるこの世界を、息子にも伝えたい。
メンバーとの笑顔の出会いが、
家族の絆も深めてくれました。

「小さな子どもがいるから夜勤は難しいかな…」。そんな働くお母さんの悩みに、「全然平気でした!」と爽快な笑顔で答えてくれる女性に出会いました。「ライフゆう」の看護スタッフ・生駒千恵子さん。4歳の息子さんとの暮らしを楽しみながら、月に2~3回の夜勤を交えた週4日の勤務スタイルで働いています。

もともと看護師として病院に勤務していた生駒さんが、重症心身障害者の施設で働くようになったのは、「楽しんでもいいんだ!」という気付きがきっかけだったのだと。メンバーさん、そしてご家族とともに人生を楽しむ生駒さんの笑顔のストーリーを、一緒にたどってみましょう。



“夜勤専門”の看護師？

もともと千葉県出身の生駒さん。「ライフゆう」のある横須賀・逗子・葉山エリアには縁もゆかりもなかったそうですが、ウインドサーフィン好きのご主人と出会ったことがきっかけで、結婚とともに葉山に移り住んで来ました。それとともに鎌倉の一般病院に勤めることになりましたが、その勤務スタイルは、“夜勤専門”だったのだとか。

“最初の2~3年は常勤でしたが、主人の影響でウインドサーフィンにハマってしまって(笑)。月に10回ほど、夜勤専門の勤務をしていました。夜勤明けは、髪の毛をギュって縛って「鎌倉の海へ直行!」みたいな暮らしだったんですよ。”

“昼夜逆転”というより、昼夜問わず仕事に趣味に明け暮れる毎日。そんな生活に変化が訪れたのは、息子さんが産まれたとき。産休明け、日勤のみで働くうちに、「違うことがしたい」という気持ちが芽生え始めました。

“10年働いて、ある程度“やった感”があったんです。このまま働くか悩んでいたとき、重心（重度心身障害者の施設）で働いている知り合いの話を聞いて。「たこ焼き焼いた」とか、「お出かけした」とか、すごく楽しそうに話をしてくれました。「楽しんでもいいんだ!」って思って。そういう人生もあるかな、と、思い切って飛び込んでみました。”

「重度心身障害者の施設で働く」という看護師として大きな決断。このとき、息子さんは3歳。看護師14年目の春のことでした。

「これでいいんだ」という確信をくれた“笑顔”

「楽しそう」という直感を信じて飛び込んだ重心の世界。でも、自分で選んだ道とはいえ、最初はカルチャーショックにも似た感覚を味わったのだと。

“やっぱり“生活の場”だったんですよね。メンバーさんは病気を持っているけど、それが当たり前で普通に生活しているので、「これも看護師の仕事なの?」と思うことが、結構あって。”

白衣ではなくジャージを着て、支援スタッフと同じように、時にはメンバーさんの外出に付き添ったり、イベントの準備をしたり。“新しい世界”を受け入れるまでには、葛藤があったと言います。でもそれを乗り越え、「これでいいんだ」と思えたのは、そこに“笑顔”があったから。

“メンバーさんもスタッフも、みんな笑ってるんです。ごはんを食べるときも、イベントのときも、必ず誰かが笑っていて。「この世界にいたいな」と思いました。今思うと、病院のときは、患者さんにすごく気を使っていましたのかもしれませんね。でも、ここではメンバーさんにも冗



談が言えてしまうような、楽さがある。気を使わなすぎて申し訳ないくらい（笑）、楽しめてもらっています。”

夜を越えて、つながる仕事

重心施設で1年弱の勤務の後、次の職場として、自宅により近い「ライフゆう」を選んだ生駒さん。息子さんが4歳になったことを機に、夜勤を再開する決断をしました。

“夜の状態を知りたい、と思ったんです。日勤だけでは、メンバーさんの24時間の動きがわからなくて、中途半端な感じがしていて。「ライフゆう」は、家が近いという安心感もあったので、思い切って始めてみました。”

16時～翌朝9時半という長時間勤務の上、少人数のため雑務も多く、緊張感も伴う夜勤。月に2～3回とはいえ、妊娠出産期のブランクがあった生駒さんにとって、体力的にも精神的にも負担が大きかったはず。でもこの決断は、その後の仕事に、何事にも代え難い価値をもたらしてくれました。

“夜騒いじゃう人や、よく寝ている人、それぞれの夜の状態を知ることで、日勤のとき、「だからこんなに眠そうなんだな」と、自分の頭の中で描けるようになりました。

「夜勤の方が困らないように、昼間のう

ちに解決しておこう」と、これまでできなかった小さな気配りができるようになりますたし、考え方につながった気がします。”

寝て、起きて、ここはまさに、暮らしの場。メンバーさんにとっての“家”です。「夜勤をやって、もっとメンバーさんと近づけた」と笑顔で語る生駒さんは、看護師としてだけではなく、ひとりの母親としても、新たな気付きを得たようです。

“私も母親なので、「メンバーさんは家族と離れて不安だったんだろうな」と思うんですけど、意外とすぐに、しっかりと自分の世界を築けたりするようです。

親が思うより、子どもは強かったりします。ご家族の事情はそれぞれですが、施設に入所するというのは、一人ひとりの自立につながっていきますよね。面会で家族の時間も持てますし、長い目で見ると、家でずっと過ごすより、お互いにとつていいことなのかな、と思います。”

「ママ夜勤行くよ」に、ニヤッ?

「親が思うより、子どもは強い」。この気付ちは、息子さんに対しても同じだったと生駒さんは語ります。

夜勤を再開して約半年。小さな息子さんとの暮らしの中で不安を抱えながらのスタートでしたが、旦那さんの協力も得られ、今では家族の暮らしのペースも整ってきました。そして、旦那さんと息子さんは、“男同士の時間”を楽しむようになったのだとか。

“最初は「泣いちゃったらどうしよう



……」って思ったんですけど、全然平氣でした。今では「ママ夜勤行くよ」って言うと、ふたりでニヤッ（笑）って。たぶん、夜勤の夜はふたりだけの内緒の楽しみがあるんだと思います。息子とパパの関係が深まっているんだろうな、と思いますし、家族の形としても、ときどき離れるくらいのほうがちょうどいいのかもしれません。”

「これからもこの仕事を続けていきたい」と言う生駒さん。メンバーさんたちとの出会いから、息子さんへ伝えたいメッセージも生まれたようです。

“「ママはこういうところで働いているんだよ」と伝えていきたいですし、息子にも、ここに来てメンバーさんたちと接してほしいな、と思います。”

この前も、コンサート会場で小さい子が怖い顔をしてメンバーさんをみていたという話を聞いたんですが、知らないと確かにびっくりしますよね。「こういう人がいて当たり前」っていう感覚を身につけてほしいな、と思っています。”

「お互い楽しみましょうね」という気持ちで

親御さんに代わり、メンバーさんの暮らしを支える「ライフゆう」の仕事。「責任はすごく感じるけど、気負っていない」と話す生駒さんは、これまでの人生を楽しんできた姿勢そのままに、今の仕事を存分に楽しんでいます。

“「何かあってはいけないな」と思う一方、「お互い楽しみましょうね」という気持ちでやっています。楽しめるのは、やっぱりメンバーさんがよく笑ってくれるから。私も自然に、笑顔になっちゃうんですよ。”

ひとりの母親として、看護師として。昼も夜も「暮らし」に向き合う生駒さんの人生のストーリーは、これからもメンバーさんの笑顔とともに、続していくことでしょう。

私の夜勤のお楽しみ
朝食をとりながら、湘南国際村から海を見渡す景色。
朝霧がかかっていて、まるでリゾート地にいるような気分を味わえます。





「ケアホームができたら絶対迎えに来る」

メンバーさんとの約束の場所で働く喜びと誇りを胸に。

「住み慣れた地域でいつまでも暮らしたい」。そんな、人として当たり前の願いが、重度重複障害者・重症心身障害者のみなさんには叶わないことがあります。約8年前、「ゆう」のメンバーさんの中にも、ご家族の病気のため、やむを得ず県外の施設に入所された方がいらっしゃいました。それは、メンバーさんにとっても、ご家族にとっても、スタッフにとっても、不本意でやりきれない出来事でした。

「ケアホームができたら絶対に迎えに来る」。当時、「ゆう」のスタッフとしてそんな想いを抱いた田辺なおみさん。現在は、そのケアホームのキーパーソンとして、日夜メンバーさんの暮らしを支え続けています。そんな田辺さんが、今、思うこととは——。メンバーさんと田辺さんの“約束”的ストーリー、そして、メンバーさんとともに生きるこの仕事の意味を、感じ取ってみてください。

母のような愛情と、 地域生活を支える責任と

4人のメンバーさんが、それぞれの部屋で自立生活を送るケアホーム「はなえみ」。田辺さんはここで、キーパーソンとして働いています。「キーパーソン」とは、日夜入れ替わるスタッフ間の連絡に携わる現場リーダーのこと。体調や睡眠、食事の様子など、メンバーさんの暮らしを複数のスタッフで支えるケアホームの仕事に欠かせない、重要な役割を担っています。

田辺さんは、週1日の夜勤を交えた週5日勤務で、「はなえみ」で暮らす4人のメンバーさんの暮らしを支えています。それに加え、月に1~2日は日曜日に夜勤に入ることも。

“今、3人の方は、毎週日曜日の午後に、ご家族のもとに帰られます。でも、お母様が亡くなられていて、お父様もご高齢で、ずっとここで過ごされているメンバーさんがいらっしゃって。それで、日曜日の夜はスタッフがひとり夜勤に入っているんです。”

メンバーさんやご家族の事情はそれぞれ。一人ひとりの暮らしの場であるケアホームでは、このように様々な形で、スタッフが勤務を組んで対応しています。中でも夜勤は、メンバーさんの様子を気にしながら廊下に布団を敷いて仮眠をとるような、心身ともに負担の大きい仕事。でも通所施設「ゆう」での勤務を経てケアホームで働く田辺さんは、ここならではの喜びも感じているのだとか。

“ここに帰って来られると、メンバーさんは本当にホッとした顔をしていらっしゃっ

て、「ああ、おかえり」と母親のような気持ちになります。楽しいことがあってニコニコしていたり、声を出して笑っていたり、それは、「ゆう」で見せるのとは違う顔。メンバーさんの両方の表情を見られるのは、うれしいですよね。”

ジャズが大好きで自室でCDを聴きながらくつろいでいる充さん、いつも同じ場所にいるのが好きな慎吾さん、日中の楽しいことを思い出してか夜遅くまで笑い声のある友紀子さん、「ゆう」で動かした身体をゆっくり休める奈々さん。田辺さんは、4人のキャラクターについて、目を細めながら楽しそうに話します。

“メンバーさんたちは、まるで本当の兄弟姉妹のようにお互いを思いやりながら暮らしています。私たちに「お母さんの代わり」はできないかもしれません。でも、メンバーさんが体調を崩されても、ご家族は、安心して私たちに委ねて行かれる。そうやって信頼してくださっていることは責任を感じますが、うれしいですし、やりがいにもつながりますね。”

田辺さんは、一方で、「災害などがあったとき、自分たちでだけは逃げられない」という緊張感も抱いていると言います。夜間は、メンバーさん4人に対して、スタッフは2



人。歩くことのできないメンバーさんを自力で連れ出すことは、大変な困難を伴うことです。このため田辺さんは、「ゆう」への送り迎えに車椅子を押して歩く際、近所の方にできるだけ挨拶をしながら通ったり、ケアホームで開くイベントにもご招待したり。メンバーさんと地域の人々とのつながりをつくるため、日々努力を怠りません。

母親のような愛情と、地域生活を支える責任感。より家庭に近い暮らしを支えるケアホームの仕事に必要不可欠なこれらの要素を、田辺さんは自然に感じ取り、実践しているのです。

約束の場所で、 「私も暮らす」という決意

田辺さんがみなと舎で働き始めたのは、15年前。それまで、子育てをしながら主人の仕事を手伝っていた田辺さんがこの世界に飛び込んだのは、2人目のお子さんの誕生がきっかけでした。

「実は、下の子に発達障害があることに気がついて。それで、みなと舎でお仕事をしていく中で、私にとって娘にとって



も、何かプラスになるといいな、という気持ちで入ったんです。”

最初は非常勤で介護スタッフとして働き始め、すぐに常勤になった田辺さん。それは、仕事から得るものが大きかったからだと言います。

“メンバーさんから「待つ」気持ちを学びました。こちらの想いがそのまま伝わるとは限らない。ゆっくりと順を追って、一つひとつ理解してくれることを待つことの大切さを、すごく感じて。自分も、娘に対して待てるようになったかな、と思います。”

そんな田辺さんに、ひとつの試練が訪れます。「ゆう」で田辺さんがリーダーを務める部

屋に所属していたメンバーの朋美さん(※)。彼女のお母様が病気を患い、朋美さんは静岡の施設に入所することになったのです。当時、みなと舎唯一のケアホーム「はなえみ」は満室。県内に入所できる場所も見つからず、止むに止まれぬ苦渋の決断でした。

“朋美さんが入所するとき、静岡まで一緒に行ったのですが、そこがあまりにも遠くて。お別れするときに、「もしケアホームができたら、絶対私が迎えに来て、そこで暮らす」と誓いました。”

それから約1年後、メンバーさん、ご家族、スタッフ、様々な人々の想いが重なりあい、みなと舎として2つ目のケアホーム「はなあかり」が誕生。田辺さんは約束通り、朋美さんを迎えて行くことができました。

“お別れのときは何とも淋しい思いで帰ってきたので、迎えに行けたときは本当にうれしかったです。「はなあかり」ができて、入ってもらえることが決まって、それはそれは、うれしかったですね。”

「はなあかり」誕生と同時に、田辺さんは「ゆう」からケアホームの勤務に異動。キーパーソンとして、日夜、顔の知れたメンバーさんの暮らしを支えるようになりました。

メンバーさんと一緒に、笑ってみたい
今年はじめには、6年間勤務した「はなあかり」から「はなえみ」へ異動し、ますます仕事の幅を広げている田辺さん。今では成長したお子さん、旦那さま、そして3匹の犬とともに、プライベートも楽しみながら、メンバーさんの日々の暮らしを支え続けています。最後に、この仕事について感じていることを聞きました。



“みなと舎のスタッフは、メンバーさんたちの表情を本当によく見ていて、第一に考えて動く。惜しみなく動き、適格に手を差し伸べる。そんな場所で働いていることを、すごく誇りに思っています。”

これからもメンバーさんには、健康面に気をつけながら、美味しい物をたくさん食べていただきたい。企画も楽しんでいただきたい。私も、メンバーさんと一緒に笑ってみたい。楽しい時間を過ごしていきたいと思っています。”

メンバーさんやご家族の、すべての願いを叶えることができないかもしれない。でも、より良い暮らしを送ってほしい、笑顔でいてほしい——。

そんな等身大の想いでつくられているみなと舎の暮らしの場。ここには今日も、メンバーさんの想いを明日へつなぐ、たくさんの笑顔があふれていることでしょう。

※朋美さんのお母様のお話はP.6へ

私の夜勤のお楽しみ
日中に見られない、
メンバーさんのとびきりご機嫌な笑顔に出会える
こと。毎日見られるわけじゃないので、余計に嬉しいですね。



Report

夜の方程式「人^x×「時^y×「空間^z」=「一人ひとりの大切な暮らし」

時の流れ方や過ごす場所は人それぞれ。その誰もが、夜を大切にしている。
誰かの気配を胸に抱き、安心できる場所で眠りにつくことは自分を整えて行く。そんな夜を……。



ライフゆう編 湘南国際村

看護スタッフ2名、支援スタッフ2名の、華麗なるチームワーク！



17:30 夕食・注入

20:30 ベッドへ移動・ケアチェック

メンバーさんは一人ずつ夢の中へ…



おやすみなさい

さあこれからだ。



もうすっかり夜です。



スタッフも交代で食事。

22:00 見まわり・注入(以後数回)



また来ますね。

in

明日への準備、いろいろ。

- フロアの清掃・食器洗い
- 記録の確認と翌日の指示書
- 薬出しと注入セット
- 当番表はりかえ

23:00 スタッフ仮眠

またね。

1人2時間ずつ、交代で。清潔なベッドは寝心地バツグン。

5:00 スタッフ朝食



あとちょっと
がんばる！

この後
みんなで
朝日を
みました。

5:30 ケアチェック・注入・着替え



朝ですよ

起きてるメンバーさんも、まだまだ眠いメンバーさんも。

7:30 起床



おはよ！

08:00 朝食

09:30 夜勤終了



はなえみ・はなあかり編 芦名

支援スタッフ2名で、ゆったりじっくりと…

▼ START!

15:00 夜勤開始・「ゆう」へお迎え

17:00 入浴

スタッフの手作りごはん♪

18:00 夕食



21:00 就寝



おやすみなさい★

06:00 起床・バイタルチェック・着替え

07:00 朝食

FINISH!

10:30 「ゆう」へおり、夜勤終了

FINISH!

今日もいい日に、なるように。



「明日」へのつながりをつくる 夜勤のお仕事

「ライフゆう」

看護師長 番場清美さん



「ライフゆう」の住人はメンバーさん。ここでの暮らしは、昼も夜も途絶えることなく時間が流れます。よく眠れた朝はスッキリとした顔でいられるし、日中疲れれば、ぐっすり眠ることができる。昼と夜はつながっていて、どの時間も、メンバーさんにとって大事な人生の一部です。

そんなメンバーさんの人生を支えるスタッフの仕事も、24時間つながっています。「ライフゆう」の仕事は、日勤と夜勤の2交代制。メンバーさんのケアや決められた業務をきちんと行なうことはもちろん、日勤から夜勤へ、夜勤から日勤へとスタッフ間の申し送りを徹底することで、メンバーさんにとって心地よい安定した暮らしをつないでいくことができると考えています。

「つながり」を大切にするため、夜勤専門で働くスタッフにも、必ず日勤を経験し、昼のケアが夜の状態につながっていくことを体感してもらっています。昼と夜、両方を経験することで自分のケアの結果を知り、仕事への意識につながりが生まれてくるのです。

「ライフゆう」には、自分の生活スタイル

や家庭の事情から、勤務の中に夜勤を組み合わせている方がいますが、「夜」を選んだ理由はそれだけじゃない気がしています。夜勤は少人数で、それなりの緊張感もあり、生活が不規則になり体調を整える労力も要します。でも、メンバーさんのいつもとは違うリラックスした表情に出会えると、嬉しくなります。また、夜間働くことで、昼間の時間を自分の趣味や勉強、家事のために使うこともできます。夜のメンバーさんとの関わりは、笑いあり、涙あり、発見あり。そうして迎えた夜勤明けは、心地良い疲労感が得られます。きっとメンバーさんも、スタッフの昼とは違う姿を楽しみ、応援してくれていると思います。

みなと舎には、「ライフゆう」以外にも、「ケアホームはなえみ・はなあかり」や「ショートステイゆう」での夜勤があります。メンバーさんの「ふつうの暮らし」を支え、明日へとつなぐ夜勤は、なくてはならない大切なお仕事。この冊子を通して、衣・食・住だけではなく「眠」を支える仕事の意義と喜びを、感じただけるとうれしいです。

メンバーさんの後ろを追いかけて

みなと舎

常務理事 森下浩明さん



「みなと舎の理念は何ですか?」就職活動中の学生さんや、見学に訪れた方に、よく聞かれる言葉です。本来ならば、法人として思い描くビジョンを饒舌に語るのが、私の役割なのかもしれません。でもそんなとき、私がお答えするのは、たったひとつ。「本人中心」という言葉だけです。

そもそもみなと舎は、平成9年、「どんなに障害の重い人にも地域生活を」というご家族の強い想いから立ち上がりました。当時、重症心身障害者の方々は、養護学校卒業後の行き場がなく、やむを得ず遠方の入所施設で生活を送るなど、大変なご苦労をされていらっしゃいました。「住み慣れた地域で暮らしたい」という、人として当然の願いが、叶えられずにいたのです。

ご家族の願いに背中を押されるよう始まった通所施設「ゆう」。その後、ショートステイやケアホーム、医療型入所施設「ライフゆう」に至るまで、私たちは、ご家族やご本人の要望を「使命」と捉え、様々な暮らしの場をつくりあげてきました。すべての人々が「地域社会で暮らし続ける」という当たり

前の選択(暮らしの選択)ができるように。この姿勢は、これまでこれからも、決して変わることはないでしょう。

メンバーさんがいなければ、私たちは存在しません。ビジョンや願いはメンバーさんやご家族の心の中にあり、それに寄り添うように常に後ろを追いかけているのが、私たち「みなと舎」。このため、「みなと舎」の法人としての意志は、「本人中心」という言葉に集約されているのです。

「昨日」「今日」「明日」と続く毎日。私たちにとって、一番大切なのは「今日」という日です。どんな未来を思い描くよりも、目の前にいるメンバーさんの笑顔や実感を大切に、「今」を重ねていきたい。今日の私たちの行動が、メンバーさんやご家族の「明日」の夢や希望へつながっていくことを信じて。

みなと舎は今日も、今を生きるメンバーさんを追いかけるように、歩み続けています。

ぼくも明日が楽しみだなあ
おやすみなさい。。。

